

©Eiki Mori Courtesy of KEN NAKAHASHI

森 栄喜 (写真家)

1976年石川県生まれ。2014年『intimacy』で、第39回木村伊兵衛写真賞を受賞。『tokyo boy alone』(2011)、『Family Regained』(2017)などの作品集のほか、同性婚をテーマにしたパフォーマンス『Wedding Politics』(2013-2016)がある。F/T17では新しい家族の形を提示した映像作品『Family Regained: The Picnic』を池袋西口公園、豊島区庁舎で上映した。

作・演出・出演：森 栄喜

衣裳：writtenafterwards

音楽：宮形恭平

音響：Flysound

配布物デザイン：横山 雄

英訳：クリス・グレゴリー

フィッター：横山キミ

記録映像：高橋明大

記録写真：秦 和真

宣伝美術：植田 正

制作：松宮俊文、荒川真由子（フェスティバルトーカー）

制作アシスタント：柿木初美

インターン：堂前晶子、戸倉紀乃、村上理衣奈

特別協力：ジュンク堂書店 池袋本店

企画・主催：フェスティバルトーカー



まちなかパフォーマンスシリーズ

ア・ポエット：ウィー・シー・ア・レインボー
『A Poet: We See a Rainbow』
 作・演出・出演：森 栄喜
10/20 (Sat) - 10/22 (Mon)
 ジュンク堂書店 池袋本店9階ギャラリースペース、
 南池袋公園 サクラテラス、
 東京芸術劇場 劇場前広場／ロワー広場

『定吉と金兵衛』
 作・演出・出演：L PACK.
 原案：落語『茶の湯』より
10/31 (Wed), 11/2 (Fri), 11/3 (Sat)
 豊島区立目白庭園 赤鳥庵

Written, Directed and Performed by Eiki Mori
 Costumes: writtenafterwards
 Music: Kyohei Miyagata
 Sound: Flysound
 Handout Design: Yu Yokoyama
 English Translation: Christopher Gregory
 Fitter: Kimi Yokoyama
 Video Documentation: Meidai Takahashi
 Photography: Kazuma Hata
 Publicity Design: Tadashi Ueda
 Production Coordinators: Toshifumi Matsumiya, Mayuko Arakawa (Festival/Tokyo)
 Production Assistant: Hatsumi Kakinoki
 Interns: Akiko Domea, Kino Tokura, Riina Murakami
 Special cooperation from Junkudo Ikebukuro
 Planned and presented by Festival/Tokyo

『ラジオ太平洋』
 作・演出・出演：福田 毅
10/27 (Sat) - 10/28 (Sun),
11/10 (Sat) - 11/11 (Sun)
 東京さくらトラム (都電荒川線) 車内

『テラ』
 坂田ゆかり (演出) × 福継美保 (出演) × 田中教順 (音楽)
 原案：三好十郎
 『詩劇『水仙と木魚』—— 一少女の歌える——』ほか
11/14 (Wed) - 11/17 (Sat)
 西巢鴨 西方寺

フェスティバルトーカー実行委員会
 顧問 野村 喜 公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会 会長、能楽師
 福原義春 株式会社資生堂 名誉会長
 名誉実行委員長 高野之夫 豊島区長
 実行委員長 福地茂雄 公益財団法人新国立劇場運営財団 顧問、アサヒビル株式会社 社友
 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 顧問
 副実行委員長 市村作知雄 フェスティバルトーカー エグゼクティブ・ディレクター
 齊藤 明 豊島区文化工務部長
 東澤 昭 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長
 委員 尾崎元規 公益財団法人企業メセナ協議会 理事長、花王株式会社 顧問
 稲倉千子 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授
 田中俊宏 株式会社資生堂企業文化部長
 鈴木木子 アサヒグループホールディングス株式会社CSR部門 セネラルマネジャー
 鈴木正美 東京商工会議所豊島支部 会長
 永井多恵子 公益財団法人せたがや文化財団 理事長
 渡邊圭介 豊島区文化工務部文化デザイン課長
 岸 正人 公益財団法人としま未来文化財団 劇場開放準備担当課長
 浦田真由子 公益財団法人としま未来文化財団
 あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター) 支配人
 米原晶子 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
 長島 輝 フェスティバルトーカー・ディレクター
 河合千佳 フェスティバルトーカー 共同ディレクター
 葦原円花 フェスティバルトーカー 事務局長
 田中真理子 豊島区総務部総務課長
 監事 法務アドバイザー 福井健策、北澤尚登(骨董通り法律事務所)

フェスティバルトーカー実行委員会事務局
 エグゼクティブ・ディレクター 市村作知雄
 ディレクター 長島 輝
 共同ディレクター 河合千佳
 事務局長 葦原円花
 制作 荒川真由子、松宮俊文、岡崎由実子、武田侑子、新井雅菜、藤井友理、
 長田崇史、四宮章吾、山縣昌雄
 広報チーフ 小倉明紀子
 広報 神永真美、細川浩伸、横田あす美、吉田幸恵
 経理 堤 久美子
 総務 米原晶子、平田幸栄、藤島麻希
 票券 武井和美

技術監督 寅川英司
 照明コーディネーター 木下尚己(株式会社ファクター)
 音響コーディネーター 相川 晶(有限会社サウンドウーズ)
 アートディレクション 氏家啓雄(有限会社氏家プランニングオフィス)
 イラスト Naomi Katsu
 ウェブサイト 竹下雅成(有限会社氏家プランニングオフィス)、株式会社Mame
 海外広報・翻訳 ウィリアム・アンドリュース
 執筆 鈴木理映子

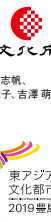
主催 フェスティバルトーカー実行委員会
 豊島区／公益財団法人としま未来文化財団／NPO法人アートネットワーク・ジャパン、
 アーツカウンシル東京・東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

アジアシリーズ共催 国際交流基金アジアセンター
 協賛 アサヒグループホールディングス株式会社、株式会社資生堂
 後援 外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM
 特別協力 西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、
 株式会社サンシャインシティ、東京都交通局、ジュンク堂書店 池袋本店
 東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
 一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、
 公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会
 特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり、池袋西口公園活用協議会、
 南池袋公園をよくする会、ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ、
 池袋ホテル会、サンシャインシティプリンスホテル
 株式会社ポスターハリス・カンパニー、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、
 有限会社アップリンク

平成30年度文化庁国際文化交流拠点形成事業(豊島区国際アート・カルチャー都市推進事業)
 フェスティバルトーカー18は東京芸術祭2018の一環として開催されます。
 フェスティバルトーカーは東アジア文化都市2019豊島を応援しています。

インターン 伊藤 真、円城寺すみれ、木村 夏、小堀詠美、竹内萌佳、堂前晶子、戸倉紀乃、中岡志帆、
 中村風哉、長谷川智美、前田麗奈、松本理沙、宮本日向子、村上理衣奈、山皇真紀子、吉澤 萌

スペシャルサンクス：F/Tサポーターのみなさま
 会期：平成30年(2018年)10月13日(土)ー11月18日(日)



Festival/Tokyo Executive Committee
 Advisors: Man Nomura (Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations; Moh actor) Yoshiharu Fukuhara (Honorary Chair, Shiseido Co., Ltd.)
 Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano (Mayor of Toshima City)
 Chair of the Executive Committee: Shigeo Fukuchi (Advisor, New National Theatre Foundation; Senior Alumnus, Asahi Breweries, Ltd.)
 Vice Chairs of the Executive Committee: Sachio Ichimura (Director, NPO Arts Network Japan; Executive Director, Festival/Tokyo) Akira Saito (Director, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Akira Touzawa (Secretariat Director, Toshima Mirai Cultural Foundation)

Committee Members: Motoki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts; Corporate Advisor, Kao Corporation) Sumiko Kumakura (Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts) Toshihiro Tanaka (General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.) Atsuko Suzuki (General Manager, CSR Department, Asahi Breweries, Ltd.) Masami Suzuki (Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima) Taeko Nagai (Chair, Setagaya Arts Foundation) Keisuke Watanabe (Director, Cultural Design Section, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Masato Kishi (Manager, New Theater Opening Preparation Room, Toshima Mirai Cultural Foundation) Naoko Hasuike (Toshima Mirai Cultural Foundation; Executive Director, Owispot Theater / Toshima Performing Arts Center) Akiko Yonehara (Representative, NPO Arts Network Japan) Kaiko Nagashima (Director, Festival/Tokyo) Chika Kawai (Co-Director, Festival/Tokyo) Madoka Ashihara (Administrative Director, Festival/Tokyo)

Supervisor: Mariko Tanaka (Director, General Affairs Section, General Affairs Division, Toshima City)
 Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotō Dori Law Office)

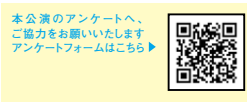
Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat
 Executive Director: Sachio Ichimura
 Director: Kaku Nagashima
 Co-Director: Chika Kawai
 Administrative Director: Madoka Ashihara
 Production Coordinators: Mayuko Arakawa, Toshifumi Matsumiya, Yumiko Okazaki, Yuko Takeda, Wakana Arai, Yurii Fujii, Takashi Osada, Shogo Shinomiya, Masao Yamagata
 Public Relations Director: Akiko Ogura
 Public Relations: Mami Kamimaga, Hironobu Hosokawa, Asumi Ueda, Yukie Yoshida
 Accounting: Kamiko Tsutsumi
 Administrators: Akiko Yonehara, Saki Hirata, Maki Fujishima
 Ticket Administration: Kazumi Takei
 Technical Director: Eiji Torakawa
 Lighting Coordination: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.)
 Sound Coordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
 Art Direction: Yoshio Ujije (Ujije planning office)
 Illustrations: Naomi Katsu
 Website: Masaya Takeshito (Ujije planning office), Mtame, Inc.
 Orsrasae PR, Translation: William Andrews
 Copywriting: Rieko Suzuki

Interns: Mai Ito, Sumire Enjaji, Natsui Kimura, Emmy Kobori, Moeka Takeuchi, Akiko Domea, Kino Tokura, Shiho Nakaoka, Kazane Nakamura, Satomi Hasegawa, Reina Maeda, Risa Matsumoto, Hinako Miyakoto, Riina Morakami, Makiko Yamazato, Moe Yoshizawa

Special thanks to the F/T Volunteer Sporters
 Organizers: Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ), Arts Council Tokyo & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture) Asia Series co-organized by the Japan Foundation Asia Center

Sponsored by Asahi Group Holdings, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Endorsed by the Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO, J-WAVE 81.3 FM
 Special cooperation from SEBU IkebukuroOrionTen, TOBU DEPARTMENT STORE Ikebukuro, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Toei Transportation, Junkudo Ikebukuro
 In cooperation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Ikebukuro West Gate Park Management, Neighborhood of the Minami Ikebukuro Park, Hotel Metropolitan Tokyo Ikebukuro, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association, Sunshine City Prince Hotel
 PR Support: Poster Hari's, Waseda University Tsuibouchi Memorial Theatre Museum, UPLINK

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2018
 Festival/Tokyo 2018 is organized as part of Tokyo Festival 2018.
 Festival/Tokyo supports Culture City of East Asia 2019 Toshima.
 Period: October 13th (Sat) to November 18th (Sun), 2018



まちなかパフォーマンスシリーズ

A Poet: We See a Rainbow

ア・ポエット：ウィー・シー・ア・レインボー

作・演出・出演：森 栄喜

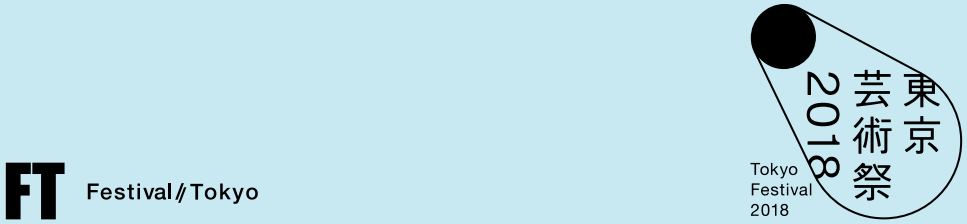
2018
10.20 Sat - 10.22 Mon

ジュンク堂書店 池袋本店 9階ギャラリースペース、
 南池袋公園 サクラテラス、
 東京芸術劇場 劇場前広場／ロワー広場

Junkudo Ikebukuro (9F Gallery Space),
 Minami Ikebukuro Park (Sakura Terrace),
 Tokyo Metropolitan Theatre (front plaza & lower plaza)

F/T in the City Performance Series
A Poet: We See a Rainbow

Written, Directed and Performed by
Eiki Mori



池袋の虹

伊藤貴弘

（東京都写真美術館 学芸員）

池袋の虹（東京都写真美術館蔵）

池袋の虹（東京都写真美術館蔵）

昨年、森栄喜がフェスティバルトーキョーのまちなかパフォーマンスシリーズで上映した《Family Regained: The Picnic》（2017年）は13分ほどの映像作品で、人々が行き交う池袋の街中で撮影されている。登場するのは、森自身と、もう1人同い年くらいの男性、そして小学生くらいの男の子の3人だ。彼らはマレーシアのファッションブランド「モト・ゴー」が森の依頼を受けてデザインした真っ赤な衣装に、おそろいの真っ赤なコンパースのスニーカーを履き、インスタントカメラを片手に街中を歩く。彼らが道行く人にお願いするのは、そのインスタントカメラで自分たちのポートレイトを撮ってもらうこと。偶然、彼らの依頼を受けた人々にしてみれば、まるで記念写真のようなポートレイトは、真っ赤な3人にとっては「家族写真」だ。

この《Family Regained: The Picnic》という映像作品は、〈Family Regained〉（2017年）という写真作品のシリーズから生まれている。このシリーズで森は、夫婦やカップル、友人など、親しい人々と自らをセルフタイマーで撮影し、イメージ全体を赤くプリントした。多くの作品は被写体となった人々が暮らしている家の中で撮影され、家族写真のような体裁となっている。森が「家族写真」に一緒に写り込むことで浮かび上がるのは、家族という枠組みそのもの。森は被写体となった人々が普段身につけている衣服を借りて撮影に臨み、ポーズもどこか似せているため、違和感なく溶け込んでいることも多いが、かえてその微妙な差異が根本的な問いを投げかけてくる。家族とは、いったい何だろうかと。

森には《Wedding Politics -Sugamo-》（2015年）という《Family Regained: The Picnic》とよく似た構造を持つ映像作品がある。当時のパートナーと始めた、同性婚の実現を訴えるプロジェクト〈Wedding Politics〉（2013～16年）の一環として制作されたこの映像作品は、年輩の買い物客でにぎわう巣鴨の商店街で撮影されている。森たちは結婚衣装に見立てた、おそろいの白いタンクトップに着替えて街中を歩き、偶然通りかかる人々にインスタントカメラで自分たちの撮影を依頼する。映像には素気なく断られる様子も写っているが、多くの人々は巣鴨では少し風変わりな格好をした2人のお願いを快く聞き入れ、インスタントカメラのシャッターを切る。2人と

っては「結婚記念写真」だが、シャッターを切った人々の目にはどのように映っていたのだろうか。

《Family Regained: The Picnic》は池袋、《Wedding Politics -Sugamo-》は巣鴨と、どちらも豊島区内で撮影されている。2015年に渋谷区で日本初の自治体による同性間のパートナーシップを認める条例が施行されたが、両作品の舞台となった豊島区では、今年の7月に請願が採択され、¹9月の区議会で区長がパートナーシップ制度の導入を表明したばかりだ。²「アーティストが思い描く理想や想像と社会の現実は、多少時差はあるかもしれないけど、本来、パラレルに進むべきだと思うんです。でも、近年は自分の理想に対して、現実の動きが後退しているようにさえ感じます」³と、森はあるインタビューで述べているが、最近では現職の衆議院議員が月刊誌に寄稿した文章の中で「行政がLGBTに関する条例や要綱を発表するたびにもてはやすマスコミがいるから、政治家が人気とり政策になると勘違いしてしまうです」⁴とLGBTをめぐる大手メディアの報道姿勢を批判し、LGBTの人々に対する法的整備についても否定的な意見を述べるなど、森の危惧が現実のものとなってしまうような出来事も起こっている。

《Family Regained: The Picnic》は、インスタントカメラの最後の1枚を撮り終えた森が、「家に帰ろう」と2人に呼びかけて終わりを迎える。映像の後には、「ピクニック」中に撮影した写真がやはり赤くプリントされ、スライドで流れる。最後に森が撮っていたのは、なかよくじゃれ合う2人の姿だ。図らずも記念写真ようになった1枚に写る2人は、まるで親子のように見えるかもしれない。そこに再び森が加わったとき、果たして3人の姿はどのように見えるだろうか？「家族にパパが2人いる風景っていまは異質かもしれないけど、10年後には普通のことになっているかもしれない。この赤が異質ではなくなる未来を願っています」⁵と前出のインタビューで森は述べている。フェスティバルトーキョーの会期中、《Family Regained: The Picnic》は池袋西口公園と豊島区庁舎の2か所で上映された。公園に設置された大きなスクリーンと庁舎入口の小さなモニターから放たれる真っ赤な光は、森の声を代弁するかのように、水たまりや自動ドアに反射して人々が行き交う街中へと広がってゆく。

街中で声を上げること。それは森が《Family Regained: The Picnic》に先立って発表した映像作品《Family Regained: The Splash -We brush our teeth, take a shower, put on pajamas and go out into the street》（2017年）のテーマの1つでもあった。15分あまりの映像作品の中で、デイヴィッド・ホックニーを彷彿とさせる白と黒のポーター柄のカットソ



FIT18「Family Regained: The Picnic」より

FIT18「Family Regained: The Picnic」より

ーを着た森は、⁶バスタブの中で「ピクニック」にも登場する男性の歯を磨き、体を洗い、バジャマに着替えさせ、そのままの姿で一緒に街中へと繰り出してゆく。そこには、1969年にニューヨークのゲイバー「ストーンウォール・イン」で警察の不当な捜査に対して初めて抗議の声を上げ、その声を広げていった性的マイノリティの人々の姿が重ねられている。アメリカでは続く70年代に同性愛者の権利獲得運動が盛り上がりを見せたが、80年代に入るとエイズ発症者数の増加に伴って生じた混乱から、停滞を余儀なくされてしまった。森は70年代に人々が描いた理想に思いを馳せ、相手を慈しむような親密な手ぶりで、バスタブの中からその理想を今に呼び起こす。失なわれたものを、再び失われつつあるものを「取り戻す (regain)」ように。

池袋をピクニック中に出会った1人が持っていた傘には、偶然にも虹色の縁取りがされていて、ほんの一瞬だが、カメラは虹を写す。画面を横切る偶然の虹。今年はこの街にどんな虹が架かるのだろうか。

- 平成30年第2回豊島区議会定例会において、30請願第3号「豊島区における『パートナーシップの宣誓制度』創設に関する請願」と30請願第4号「豊島区の区営住宅に『同性パートナー』も入居できるよう求める請願」が採択された。以下の豊島区議会のウェブサイトを参照。 https://www.city.toshima.lg.jp/367/kuse/gikai/kekka/h28/1807171033.html（最終閲覧日：2018年9月20日）
- 平成30年第3回豊島区議会定例会本会議における高野之夫区長の発言。以下の毎日新聞による報道を参照。「豊島区も『パートナーシップ制度』導入へ」https://mainichi.jp/articles/20180920/k00/00m/040/093000c（最終閲覧日：2018年9月20日）
- ライターの高島泰介によるインタビューでの森の発言より。『美術手帖』2017年11月号、55頁。
- 杉田水脈「[LGBT]支援の度が過ぎる」[新潮45] 2018年8月号、59頁。
- 『美術手帖』前掲書、54頁。
- タイトルの「The Splash」はデイヴィッド・ホックニーがカリフォルニア滞在中の1967年に描いた《A Bigger Splash》から引用されている。カリフォルニアでホックニーはプールをモチーフにした作品を数多く制作した。その中には、ホックニーの当時のパートナー、ピーター・シュレンジャーがモデルとして登場している作品もあり、ホックニーにとって一つの幸福な時代が描かれている。《A Bigger Splash》は飛び込みの水しぶきを中央に据えた、プールの連作の代表作。

伊藤貴弘

東京都写真美術館学芸員。1986年東京生まれ。武蔵野美術大学美術館・図書館を経て、2013年より東京都写真美術館に学芸員として勤務。主な企画展に「長島有里枝 そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。」展、「いま、ここにいる―平成をスクロールする 春期」展など。

時間と空間、詩、そしてアクティビズム

山田創平

（社会学者、京都精華大学准教授）

山田創平（2017年）

山田創平（2017年）

わたしは森栄喜の作品を冷静にみることができない。彼の写真に、鮮やかな既視感を感じながら、同時にわたしは、実際にはそのような光景を見たことがないと気づく。

その写真にうつしとられた、青い氷河期の空気を閉じ込めたように静かで透明な、夜明け前の東京の街なみも、白い光の中でまどろむその美しい人も、わたしは確かに見たことがある。それはどこまでも懐かしく、わたしのこれまでの生涯の中でも、とりわけ大切な記憶である。しかし、その記憶をゆっくりとたどり、あの朝の、あるいはあの白い光に満ちた真夏の午後の出来事を詳細に思い出そうとしても、できない。それはあたり前といえばあたり前のことで、なぜならこの写真はわたしが撮ったものではないからである。

山田創平（2017年）

その写真に現れるその空間は、わたし自身が生きた空間であり、わたしの人生にとって最も切実で大切な美しい空間である。しかし、わたし自身、実際にその写真にうつしとられた空間を見たこともなければ、経験したこともない。

あの東京の街なみも、あの青年も、わたしは実際に見たことはない。見たことはないのに、経験したこともないのに、ここにはわたしの記憶があると思えてならない。わたしは彼の作品の中でゆっくりと息をし、安らぐことができる。

そしてこの経験は、わたしの中にさらなる感覚を呼び起こす。それはその写真が、わたしがこれまでの人生で失った何かを、あるいは望みながらも、決して手にするのでできなかった何かをうつしとっているのではないかという感覚である。それは巨大な欠落であり、おそらくわたしが、永久に埋めることのできない空隙である。

わたしにとって、森栄喜の作品が、他のどの作家の作品とも異なる、特別な魅力をもつ理由はここにある。彼の作品は基本的に写真という「平面」だが、彼の写真を「目にする」という経験それ自体は、極めて空間的

で立体的な経験なのだ。ここで言う「空間」にはもちろん「時間」が含まれる。

日々生活をしているなかで、わたしは時々、時間が錯綜する感覚にとらわれる。それは時間という観念それ自体が存在していないのではないかという感覚に近いかもしれない。過去が現在に、現在が過去にびたりと重なってしまうような感覚。死者の書いた文章を読んでいるとき、私の心の中に、死んだはずのその人が、確かに存在していると感じる、その感覚に近いかもしれない。

わたしは垂直的で水平的で、直線的に時が流れる「静的な」空間を生きていない。ときに過去と現在は分ちがちがたくからまりあい、死者と語り合い、いまだ出会ったことのないその人と、見たこともない街を歩く。わたしが生きている空間はそういう「動的な」空間である。そのように空間が歪み、複雑に絡まり合い、時間が行ったり来たりする世界を生きるとき、わたしは自分の人生に一瞬、光が明滅するのを感じる。過去と現在がぶつかり合って一瞬、光がうまれる感覚に近い。その一瞬のために、わたしは生きているような気がする。森栄喜の写真にはその「光」が確実に存在している。それは彼が今でもフィルムの使用にこだわる姿とも、おそらく関係している。

山田創平（2017年）

2018年に至り、森栄喜が詩の朗読という新たなパフォーマンスに取り組むと聞いたとき、わたしはその理由を、わたしなりに理解した。朗読は空間的なパフォーマンスである。そして詩は、時空を超える。普通、文章を書くときには時制を統御しなければならない。過去のことは過去形で、現在のことは現在形、未来のことは未来形で書かねばならない。そしてその文章が描く「空間」が変わるときには、空間が変わったことを明示しなければならない。東京での出来事と、ニューヨークでの出来事を混ぜて書いてしまったら、何の文章かわからなくなるだろう。しかし詩にはその制約がない。その自由な時空のありようは、彼の写真芸術の空間性そのものである。

森栄喜のエッセイ、Letter to my son は、彼の詩作の一端を知る上で興味深い。そこでは時空が自由に行き来する。彼は今回、朗読のパフォーマンスのために、どのような詩を書くのだろうか。「詩が読まれる」とは、思えば不思議な行いである。声は一瞬で消える。その意味で、声に出して詩を読む人は、世界の輝きが一瞬であることを、全身全霊をもって示す人である。しかし声は、音のようではあるが、しかし音ではない「何か」



© Eiki Mori Courtesy of KEN NAKAHASHI

山田創平（2017年）

山田創平（2017年）

として人々の記憶に残る。あの経験が、自分にとって何だったのかが、ずっと後になってわかることがあるように、あの声が、何を言い、何を伝えようとしていたのかが、ずっと後になってわかることがある。つまり、詩は一瞬で消えるが、しかし永遠に残る。

山田創平（2017年）

彼にとつての写真芸術がそうであったように、ここでもやはり、森栄喜は時空を越えようとしているように思えてならない。そしてその実践が路上に出るとき、その表現は社会を変える力をもつだろう。市民社会が旧来の価値観や規範の変化を拒み、深刻な差別や社会的排除から目をそむけ、それらを野放しにすると、彼のパフォーマンスはその古い「静的な」空間にくさびを打ち込み、内側と外側をぐるりと反転させるような力を持ちうるのではないか。彼の新たなパフォーマンスが生み出す「動的な」時空は、社会を変えるエネルギーに満ち、同時に一瞬明滅し消えゆく儂い美しさに満ちた、背反する要素が同居する、複雑なものとなるだろう。それはまったくの新しい挑戦ではあるが、しかしその複雑さは、森栄喜の作品が、その最初期から一貫して持っている強度、そのものなのである。

山田創平（2017年）

山田創平（社会学者・京都精華大学准教授）
1974年群馬県生まれ。名古屋大学大学院修了。博士（文学）。専門社会調査士。厚生労働省、外務省所管の研究機関などを経て現職。編著書に「たたかうLGBT&アート」(法律文化社、2016)、共著書に「ミルフイユ04ー今日のつくり方」(赤々舎、2012)、「ジェンダーと『自由』ー理論、リベラリズム、クエア」(彩流社、2013)、「国東半島芸術祭記録集」(美術出版社、2015)、「釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココラム」(フィルムアート社、2016)、「セックスワーク・スタディーズ」(日本評論社、2018)などがある。特定非営利活動法人アートNPOリンク理事、京都市若手芸術家の居住・制作・発表の場づくり事業（HAPS）実行委員、公益財団法人企業メセナ協議会東日本大震災芸術・文化による復興支援ファンド（GBFund）選考委員